

どうぐ

『日々の道具帖』

三谷龍二著 講談社 2015

おしゃれできれいな道具は、いざ使うとなると緊張してしまっただけで使いづらい…。日々の生活で使うものは、丈夫で信頼できるのが1番！日常に溶け込む役立つ道具たちを紹介。

『あの人の食器棚』

伊藤まさこ著 新潮社 2009

毎日食べるごはん。料理を載せるお皿を選ぶのも楽しみのひとつです。スタイリストの著者が選んだ、いろいろな人のいろいろなうつわ。

『京都うつわさんぽ』

沢田眉香子著

光村推古書院 2010

京都にはたくさんのうつわがある！ありすぎて、どう探せばいいのか迷ったらこの本。作家もの、古いうつわ、使ううつわ…きっと気になるものが見つかるはず♪

『日本のかご』

えらぶ・かう・つかう』

小澤典代著 新潮社 2012

かごには素材や編み方など、たくさんの種類があるんです。世界中で生活に即して使われ、愛されてきたかご。改めて注目してみると新発見があるかも？

『暮らしのかご』

片柳草生著 平凡社 2015

キッチン、ダイニング、リビング…いろいろな場所で「かご」は使える♪工芸の世界では“編組もの”とも呼ばれます。かごのルーツや美術工芸品としてのかごにまつわる知識、かわいいかごが買えるお店の紹介まで一挙公開！

MINGEI?

『あたらしい教科書 民芸』

濱田琢司ほか監修

プチグラフィック

2007 そもそも「民芸」ってなんだろう？伝統的なもの？地方のお土産物？そう思っている人にこそ知ってほしい、現代の民芸！

『美術手帖 2019年4月号』

美術出版社 2019 「民藝」という概念が誕生したのは1925年。まもなく100年経つということで「100年後の民藝」特集。自分の身の回りにあるデザイン、使い心地、見つめ直してみませんか？

『ゆるカワ日本美術史』

矢島新著 祥伝社新書 2019 日本にはたくさんのおしゃれな美術・工芸品があります。かわいいもの、きれいなもの、そしてかわいいもの！昔のものとは思えない、ユーモラスな作品も紹介されています。もちろん民芸も！素朴で愛らしい工芸品、必見です。

民藝館

『日本民藝館手帖』

日本民藝館監修 ダイヤモンド社

2008 民芸運動の主唱者であった柳宗悦により、1936年に駒場に創設された日本民藝館。日本各地の焼き物、染織、漆器、木竹工などを集めた美術館です。蔵品の案内や柳の言葉、民藝館という空間について詳しく載っています。

『日本民藝館へいこう』

坂田和實ほか著 新潮社 2008

写真が多く、実際に行ってみたくなる1冊。ふだんの生活にこんなすてきな道具があるといいなあ～、と想像してしまいます。民藝をめぐる味わい深いエッセイもお楽しみに♪

『柳宗悦の世界』尾久彰三監修

平凡社 2006 あの千利休以上の眼をもつといわれた柳宗悦が蒐集した品物は、日用の雑貨。柳が見つけた美の世界に迫る！

柳宗悦

『蒐集物語』柳宗悦著 中公文庫 2014 全国各地の「美しいもの」を求め、愛した柳宗悦。集めたものを自分の手元に置いておくのではなく、多くの人と分かちあうために民藝館をつくりました。「なにものにもとらわれず、ものをじかに見ることが秘訣である」—民芸運動の創始者であり、日本民藝館の創立者である著者の名エッセイ。

『芹沢銈介 文様図譜』

静岡市立芹沢銈介美術館 東北福祉大学

芹沢銈介美術工芸館監修 平凡社 2014

型絵染の人間国宝として知られる染色家・芹沢銈介。植物、動物、文字、幾何学などたくさんの文様をつくりました。迫力あるもの、かわいらしいもの、めくるめく芹沢ワールドへようこそ。

『柚木沙弥郎 92年分の色とかたち』

柚木沙弥郎著 グラフィック

社 2014 戦後まもなく「民藝」と出会い、芹沢銈介に弟子入りしてから70年。96歳の現在も染色家として活躍中！チャーミングな人柄が伝わる1冊。

まわりの人々

『リーチ先生』原田マハ著 集英社文庫

2019 英国人陶芸家、バーナード・リーチは、明治42年、22歳で芸術の道を志して来日。柳宗悦、濱田庄司といった日本人芸術家との出会いが彼の人生を大きく動かします。東洋と西洋の架け橋となった生涯を描く、アートフィクション。

地域

『世界の民芸』浜田庄司ほか著 朝日新聞社

1972 民芸運動の大家たちが世界各国の暮らしの道具・民芸品を解説する写真集。スイスのパン屑集めから、イランの風呂敷まで、海外の美しい品々を紹介。どこでどのように出会ったのか、何が素晴らしいのかを写真と文章で味わうことができます。

『マトリョーシカ大図鑑』沼田元氣著 二見書房 2010

ロシアの人形「マトリョーシカ」のルーツは日本にあるって知ってましたか？その歴史、つくり方、集め方、可愛がり方など多岐に渡って特集。今までなかった、マトリョーシカのカタログ的写真絵本！

『李朝を楽しむ』太陽編集部編 平凡社 1998

李朝の工芸品は武骨で色味も控え目、派手ではないのにとっても存在感があります。そんな李朝の「用と美」を日常に生かすセンスを写真で見てください♪

『韓国的美しいもの』小澤典代ほか著 新潮社

2010 キムチなど発酵食品を作るのに欠かせないオンギ（伝統の甕）、イグサで作られたカゴのワンゴルコンイェ、小さなお膳のソバン…。日本と同じ材料を使っても、デザインや色使いが違っていても

『紅型 琉球王朝のいろとかたち』

丹羽理恵子ほか編集 サントリー美術館 2012

琉球王朝の時代、王族や士族など一部の人の衣装に用いられた染色の技法、紅型。日本や中国などとの交易を通して生み出された多彩なモチーフ、鮮やかな色彩に、圧倒されること間違いありません。

『図説 琉球の伝統工芸』

天空企画編 河出書房新社 2002 日本各地いろいろな工芸品あれど、琉球にもまた伝統があります。やちむんという焼物、ガラスや紅型など、独自の進化を遂げた沖縄の手仕事の美を紹介。

『アーツアンドクラフツ

—ウィリアム・モリス以後の工芸美術』

ステイーヴン・アダムス著 美術出版社

1989 産業革命後のイギリスで、手工芸の復興を目的として興った「アーツ アンドクラフツ」。この運動は世界各国の製品デザインに影響を与えました。

新着図書紹介

「60分でわかる微分と積分」ニュートン増刊号1
「60分でわかる統計の基本」ニュートン増刊号2

「微分・積分」「統計」という何とも難しそうな文字を見て、目を背けないでください。



数学がいかに生活と密着しているかを、大きなイラストや漫画も盛り込みながら、とてもわかりやすく紹介しています。

高2や高3でコースIに所属する人はもちろん、中3や高1で理系ロマンに興味ある人やそもそも数学って何の役に立つのだろうと思っている人、是非一度手に取って、ペラ

ペラと眺めてみて欲しいです。

自分の心に火をつけるきっかけになるかもしれませんよ。

大槻泰史

『こども六法』

山崎聡一郎著 弘文堂 2019

作者自身が小学校のときいじめられた経験があり、「もし法律を知っていれば自分を守れたのではないか」とチームを組んで作成した本です。いじめられる子が自分を守るよう、法律をだれでも読める文章になおして、ベストセラーになっています。

例えば、人に「死ね」と自殺をすすめて自殺させたら犯罪になります（刑法202条）。なぐったり、モノをうばったりするのも犯罪です。人前でバカにしたり悪口をいって、相手が訴えたら罪になることがあります（刑法230条）。

おとなにはいじめをなくす義務があって（いじめ防止対策推進法）、もしあなたが相談したひとが助けてくれなかったとしても、あきらめないで別のおとなに相談してください。警察官や弁護士、この本にのっている相談窓口でもいいです。



そしていじめにあって悩んでいる人には、ケガをしたり体調がわるくなったときはためらわずに病院へいきましょう。いじめで壊されたもの・汚されたものを保管して、メモをつけておいたり、日記をつけたりしましょう、などとアドバイスが細かく書かれています。

『森のおくから：むかし、カナダであったほんとうのはなし』

レベッカ・ボンド作 もりうちすみこ訳 ゴブリン書房 2017

1914年にカナダの山奥で実際におきた出来事をまとめた絵本です。ある晩おきた事件とその時の光景を忘れられず、少年は大きくなって娘に話しました。娘は母になり、自分の子供に少年の話をしました。そして、子供は自分



の子供に話してやりたくて、少年の体験を絵本にしました。読み終わって時間がたつごとに、「衝撃的な出来事」の光景がリアルに浮かんで来て、実際に自分が体験したかのような息遣いが聞こえてくるようです。絵本だからこんなかたちになった、というのではなく、よりリアルに「衝撃的な出来事」を伝えようとしたところ絵本という手法が最もふさわしかった、と感じさせる作品です。

門前佐智子

『@ベイベーメール』

山田悠介著 角川文庫 2015

主人公雅人は親友の恋人が変死し、事件前に届いた「@ベイベーメール」が関与していることに気づき、調査を始める。しかしそのメールが自分の教え子や恋人にも届いていて、死へのタイムリミットが間近に…。

無事に事件を解決できるのか？

迫りくる死への恐怖に緊張させられる本です。 H2 HH



『楽しい動物化石』

土屋健著 河出書房新社 2016

古生代・中生代・新生代と分類されています。人間より大きなサソリ、見た者を石に変えるメデューサという名前を持つクラゲ、（殺人クラゲにそっくり）、映画「ドラえもん のび太の恐竜」のピー助のモデル、まっすぐなアンモナイト、ばねのようなアンモナイトなど見どころたくさん。人の三倍ほどの大きさのナマケモノの化石も。巻末に所蔵博物館ガイドが載っていて、実際に見に行けます！



11月11日（月）～ 16日（土） 宗教週間チャリティ ブックバザー。

本1冊につき10円
以上寄付してもらい、
台風災害の被災者
への募金にします。



2019年（令和元年）11月6日発行

松蔭中高図書館広報誌 はと時計217号

『白銀の墟(おか) 玄(くろ)の月<1> 十二国記』

小野不由美著 新潮文庫 2019

18年ぶりの十二国記の新刊です。今の高校3年生が生まれてからずっと泰国の麒麟（きりん）と王様は行方不明だったんですね。二人がいなくなって泰が荒れ果て、二人を捜し求める所から物語は始まります。

もともと十二国記は陽子という普通の高校生が金髪的美青年にさらわれて、異世界に連れて行かれて始まります。「あなたは景国の王なのです」といわれてもその青年（麒麟）とはぐれ、出会う人に裏切られ、妖魔に襲われる。度重なる苦難を救ってくれたのはネズミ(?)だった…。

中国がモデルとおぼしき十二国の世界は日本と蝕でつながっていて、人間は木の実から生まれます。王は十二人いる麒麟しか選ぶことができず、王になったら不死が約束されます。けれど、もし王が人の道にもとることをしたら麒麟が病気になるって、死んでしまい、王も死ぬ。

陽子の一学年下に高里要という男の子がいて、彼は家で虐待されているようなのですが、彼をひどい目にあわせる人はいつも不幸になっていました。彼も実は十二国の重要人物で、蝕で日本に流されてきた人。そしてこの18年待たれていた主役の一人です（物語の中では6年ですが）。白銀は王さま驍宗の、玄(くろ)は泰麒の髪の色。